「老を養ふ」
――謡曲「養老」の背景にあるもの

伊藤 由希子

一

鎌倉時代中期（一二五二年）に成立した説話集『十訓抄』には、次のような話が収められている。

昔、元正天皇の御時、美濃の国に、貧しく賤しき男ありけるが、老いたる父を持ちたり。この男、山の木草を取りて、その値を得て、父を養ひけり。この父、朝夕、あながちに酒を愛し、ほしがる。これによりて、男、なりびさこ（ひょうたん）といふものを腰につけて、酒を沽る家に行きて、つねにこれを乞ひて、父を養ふ。

ある時、山に入りて、薪を取らむとするに、苔深き石にすべりて、うつぶしにまろびたりけるに、酒の香しければ、思はずにあやしくて、そのあたりを見るに、石の中より水流れ出づることあり。その色、酒

に似たり。汲みてなむるに、めでたき酒なり。うれしくおぼえて、そののち、日々にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。

時に帝、このことを聞こしめして、霊亀三年九月に、そのところへ行幸ありて、御覧じけり。これすなはち、至孝のゆゑに、天神、地祇あはれみて、その徳をあらはすと、感ぜさせ給ひて、のちに美濃守になされにけり。

その酒の出づる所をば、養老の滝とぞ申す。かつは、これによりて、同十一月に年号を「養老」と改められける。[1]

貧しい男が、酒好きな老父のため、山で草木をとって稼いだ金で父に酒を買い与えていた。ある日男が山で転んだところ、酒のにおいがし、不思議に思ってあたりを見まわしてみると、石の中から水が流れ出ていた。なめてみると素晴らしい酒で、その後はこの酒を汲み、父が十分満足するまで与えた。これが元正天皇の耳に入り、天皇はその地に行幸し、この男を美濃守に任命した。その酒が出たところは「養老の滝」と呼ばれ、また、このことをきっかけに、「養老」と改元された――。

年少者のための教訓書として編まれた『十訓抄』に録されたこの話において、その「至孝のゆゑに」神々が感応し酒が湧いたのだと天皇が判じ、そのために美濃守にまで出世した貧しい男の孝行こそが主題であることは言うまでもない。「養老の滝」の「養老」とは、「山の木草を取りて、その値を得て、父を養ひけり」という男の「至孝」を名状・顕彰したものと見ることができるであろう。

まさにこの滝の名をその曲名とする、世阿弥による謡曲「養老」も、『十訓抄』同様、「養老の滝」の不思

議な水にまつわる話である。雄略天皇の時代、美濃の国に「不思議なる泉」が湧いたという報告があり、勅使（ワキとワキツレ）が派遣され、現地で泉を発見した親子に出会う。「朝夕は山に入り薪を採り、われら（老父母のこと）を育んでいた子が、ある日、山中で偶然泉の水を口にすると、「世の常ならず、心も涼しく疲れも助か」ったため、家に持ち帰り父母にも飲ませたところ、「飲む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、朝寝の床も起き憂からず、夜の寝覚もさびしからで、勇む心は真清水の、絶えずも老を養ふ」という効験があった。それゆえに、この不思議な泉がある滝を「養老の滝とは申すなり」と、シテ（主人公）の老父は勅使に教える。感激した勅使が老父とともにこの不思議をたたえた後、シテは中入（一旦退出）する。そしてこの山の神の姿をとってふたたび登場すると、雄略天皇の治世をたたえて舞い、元の「万歳の道」へと帰って行くのである。[2]

このように、謡曲「養老」は、『十訓抄』収録の孝行説話と、多くのモチーフを共有している。しかし、この曲においては、「養老」を、子の「至孝」ということとそのまま重ねて理解することはできない。この泉の第一発見者は、『十訓抄』同様、「朝夕は山に入り薪を採り、われらを育んでいた子である。だが、この曲では、子の行動やあり方に対し、「養老」あるいは「（老を）養ふ」という言葉が使われることはない。この曲における「養老」とは、「まのあたりなる薬の水、まことに老を、養ふなり」というように、この泉から湧く水の効験をあらわす言葉であり、その効験ゆえに、この滝は「養老の滝」と呼ばれていたのである。つまり、謡曲「養老」において「老を養ふ」のは、不思議な泉から湧き出る水であり、「養老」とは、子の孝行の徳それ自体を指す言葉ではないのである。

ところで、この「養老」という演目は、脇能と言われる、この世の〈めでたさ〉・泰平をほめる祝言能である。そのことをふまえ、新編日本古典文学全集『謡曲集（一）』では、この曲のあらすじを、「孝行の徳によっ

て霊泉が湧き出し、親の長命をもたらしたのを、聖代の奇跡であるとして、平和な御代の長久をことほぐ」と、水の効験と「聖代」「平和な御代」とを結びつけて説明している。

しかし、「飲む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、朝寝の床も起き憂からず、夜の寝覚もさびしからで、勇む心は真清水の、絶えずも老を養ふ」という水の効験を、この説明のように「親の長命をもたらした」と理解することには、少なからぬ飛躍があるように思われる。この後詳しく見ていくが、この水が実際に、老父らに、あきらかな長命や若返り、不老不死をもたらしたというような表現は、この曲の中には出てこない。[3]

だとすれば、謡曲「養老」における「養老」「老を養ふ」ということの内実、この水の効験とは、いかなるものなのか。そしてそれは曲の最後、「よき御代なれや、よき御代なれや」とほめたたえられるこの世の〈めでたさ〉・泰平と、いかに関わってくるのであろうか。

二

謡曲「養老」の主な舞台は、「不思議なる泉」が湧き出た、美濃の国本巣の郡である。しかし、吉村均がすでに指摘しているように、この曲では、全体を通して、直接には描かれていない都、そしてその中心にいる天皇という存在が、常に意識されている。[4]

都から遣わされてきた勅使（ワキ）は、最初の状況説明（名ノリ）で、次のように述べる。

そもそもこれは雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても美濃の国本巣の郡に、不思議なる泉出で来るよしを奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨にまかせ、ただいま濃州本巣の郡へと急ぎ候。

この曲において勅使は、「不思議なる泉」が何であるか、そして話の全体を見届ける大事な役目を担っているのであるが、それを指示したのは天皇である。この話全体を動かしているのは、都にいる天皇という存在に他ならない。そして、「あまざかる、鄙の境」の美濃に到着した勅使と、シテである老父との間には、次のような会話が交わされる。

おことは聞き及びたる親子の者か。
さん候これこそ親子の者にて候へ。
これは帝よりの勅使にてあるぞとよ。
ありがたや雲居はるかに見そなはす、わが大君のみことのりを、賤しき身として今承る事のありがたさよ。
これこそ親子の民にて候へ。

吉村は、最初は勅使の問いをうける形で「親子の者」と名乗った老父が、相手が天皇の勅使であると知ると「親子の民」と言い直していることに注目し、「この微妙な変化に、天皇に対して民という位置にあるという、老人の自己規定を見ることができる」、そして「『養老』において、〈都〉と〈鄙〉という空間の関係は、そこに住む天皇と民との関係として示されている」と指摘する。〈都〉と〈鄙〉の距離ないし空間の関係とは、天皇と「雲居はるかに見そなはす」「賤しき身」の親子との間の空間的距離であると同時に、両者の関係のあり方を象徴するものでもあるのである。

この会話には、「さてもこの本巣の郡に、不思議なる泉出で来るよしを奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨にまかせ、これまで勅使を下さるるなり」という、先の名ノリを確認するような勅使の言葉が続いている。前節で

見た『十訓抄』収録説話では、石から酒が湧き出るという話を聞いた天皇は、みずから現地に赴いていたが、[5]この曲では、天皇自身は在京のまま勅使を遣わせているため、天皇と民との距離が縮まることはない。このことは、本曲における君と民の関係のあり方を象徴的に示している。

しかし、それは天皇と民が断絶しているということを意味してはいない。〈都〉から遠く離れていても、〈鄙〉の「不思議なる泉」の話は天皇に届き、そして天皇は、勅使を送るというかたちで、それに応答している。〈鄙〉の民からすれば、「雲居はるかに見そなはす」〈都〉にいる天皇は、かぎりなく遠く、自分たちのような「賤しき身」には手の届かない存在のように見える。しかし、〈都〉にいる天皇は、どれだけ遠く離れようと、〈鄙〉の民のことを知り及ぶ「わが大君（おほきみ）」なのである。

このように天皇が〈鄙〉や民のことを〈知る〉ということは、〈領（し）る〉、つまり国を治めるという天皇のはたらきの根幹に関わるものである。〈知る〉と〈領る〉の重なりについて、大野晋は次のように説明する。

> 占領する、統治するとは、物を残るくまなく自分のものにすること。物を残るくまなく自分のものにするとは、単に所有、領有の意味をこえて、物の性質のすみずみまでも把握することを指すようになって行く。そこから、シル（知る）が誕生した。[6]

天皇は、それが何であるかを〈知る〉からこそ、あるものを〈領る〉ことができる。[7]日本という国を〈領る〉天皇は、そこにおけるあらゆるものを〈知る〉存在であり、その〈領る〉〈知る〉はたらきゆえに、天皇はこの国を治めることができ、この国はある秩序をもって治まるのである。いうならば、この国は、天皇という存在によって治められる場である。

この「養老」という曲は、勅使と従臣の次のような謡で始まってる。

風も静かに楢の葉の、風も静かに楢の葉の、鳴らさぬ枝ぞのどけき。

楢の木の枝が鳴ることもないほどの平和な御代、泰平の御代とは、天皇が〈領る〉〈知る〉ゆえに治められ、治まっている、そのような国のあり方である。そのような泰平こそが、この曲のまずもっての前提として、冒頭に謡われているのである。

だが、「美濃の国本巣の郡に、不思議なる泉出で来るよし」が〈都〉に伝えられた時点では、天皇はその泉が何であるかを十全に〈知る〉ことができていない。菅野也寸志（覚明）は、このことを次のように言う。

美濃国に湧出した泉は、そのような曇りなき秩序に一つの異物として投げ込まれた事件である。都に奏聞されたのは、「ふしぎなる泉」の湧出である。この時点では、まだ泉は「ありがたや」と呼ばれるものでもないし、「奇瑞」でもない。それはわけのわからない霊異としてそこにある。[8]

天皇が十全に〈知る〉ことができていない「不思議なる泉」は、天皇が〈領る〉この国のあり方に、小さく入った亀裂である。その亀裂を一刻も早く修復し、真に泰平なる御代を取りもどすため、天皇は「急ぎ見て参れ」と宣旨を下し、勅使たちは「濃州本巣の郡へと急」ぐ。

その道中、勅使たちは、次のように謡う。

治まるや、国富み民も豊かにて、国富み民も豊かにて、国富み民も豊かにて、四方に道ある関の戸の、秋津島根やあまざかる、鄙の境に名を聞きし、美濃の中道程なく、養老の滝に着きにけり、養老の滝に着きにけり。

ここでも勅使たちが「治まるや、国富み民も豊かにて……」とこの国の泰平を謡っているように、「不思議なる泉」が出ようとも、天皇が〈領る〉〈知る〉ゆえに「治ま」り、そして「国富み民も豊か」であるというこの国のあり方は、その根本が崩れたわけではない。「不思議なる泉」は「不思議」であり、「霊異」ではあるが、天皇や勅使がすでに聞き及んでいる「養老の滝」という名称は、その「不思議」「霊異」が何であるかを示唆している。それを手がかりにして「不思議」「霊異」の内実を〈知る〉ことができれば、「治まるや、国富み民も豊かにて……」というこの国のあり方は、ふたたび十全なものとなるはずである。それゆえ、「親子の民」との先のやりとりの後、勅使は、

まづまづ養老と名付け初めし、謂れを詳しく申すべし。

と、「養老の滝」という名称のいわれを真っ先に問い、「不思議」「霊異」の内実をあきらかに〈知る〉ことを求める。「養老」とは何であるかを知ることは、本論の課題であると同時に、勅使、そしてその背後にいる天皇にとっての課題でもあるのである。

三

「まづまづ養老と名付け初めし、謂れを詳しく申すべし」という勅使の要求に対し、老父は次のように答える。

これに候ふはこの尉が子にて候ふが、朝夕は山に入り薪を採り、われらを育み候ふところに、ある時山路の疲れにや、この水を何となく掬びて飲めば、世の常ならず、心も涼しく疲れも助かり、さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られつつ、やがて家路に汲み運び、父母にこれを与ふれば、飲む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、朝寝の床も起き憂からず、夜の寝覚もさびしからで、勇む心は真清水の、絶えずも老を養ふ故に、養老の滝とは申すなり。

第一節ですでに見たとおり、「不思議なる泉」の水は、親子にあきらかな長命や若返り、不老不死をもたらしているわけではない。最初にこの泉を見つけた息子は、その水を飲むと、「世の常ならず、心も涼しく疲れも助かり、さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られ」たというのであるが、それは、「この水を飲んだら、疲れが吹き飛び、気分がとてもよくなった」というような、主観的・気分的変化と理解していいものに思われる。

また、老父母が、この水を飲むといつの間にか老いをも忘れ、朝に床から起きることもつらくなくなり、夜に目覚めてしまっても淋しさを感じず、勇む心が増したというのも、息子同様、主観的な変化であるようにも思われる。いずれにせよ、老父母にも、あきらかな長命や若返り、不老不死がもたらされたわけではない。

ところで、このような会話が勅使と親子の間に交わされる前、親子は登場の際に次のように謡っていた。

年を経し、美濃のお山の松蔭に、なほ澄む水の、緑かな。通ひ馴れたる老の坂、行く事やすき、心かな。
古人眠りはやく覚めて、夢は六十の花に過ぎ、心は茅店の月に嘯き、身は板橋の霜に漂ひ、白頭の雪は積れども、老を養ふ滝川の、水や心を清むらん。

長い年月を経てきた美濃の山の松蔭に、年老いた身でなお住んでいるこの私であるが、その松蔭に湧く水は今もやはり澄んでいて、松の緑を映している。老いた身であっても、通い慣れた坂を行くことはたやすく、老いていくことにも、心は安らいでいる。老人の眠りは早く覚めるものであり、夢見るのも、六十歳までの花の時期を過ぎた、淋しい内容である。心は茅葺き屋根を照らす月に歌を詠み、身は霜のおりる板橋のあたりをさすらい、白髪はどんどん増えていくが、それでも、老いを養うこの養老の滝川の水が、そんな心を清めてくれるのだろうか——。

「古人眠りはやく覚めて、夢は六十の花に過ぎ、心は茅店の月に嘯き、身は板橋の霜に漂ひ、白頭の雪は積」もるという老いの淋しさは、「不思議なる泉」の水を飲んだ後の今も、現にある。しかし、「老を養ふ滝川」の水が「心を清」めるのであろうか、老いていくことにも心は安らいでいる（「通ひ馴れたる老の坂、行く事やすき、心かな」）と、老父は自身の今のあり方を謡う。

「不思議なる泉」の水を飲んだからといって、老父母が背負っている老いというものそれ自体が解消されるわけではない。老いの淋しさ、つらさは、事実としては消え去っていない。そのような老いの事実はそのままに、それを受けとめる心が「不思議なる泉」の水によって清められ、「老をも忘れ」ることができるということが、この水が「老を養ふ」ということなのである。

ここでは、「すむ」という言葉が、水が「澄む」と、老人が「住む」の掛詞として使われているが、この後、

実際に泉を見に行った勅使と親子とのやりとりにおいて、この言葉は何度も登場する。

さてはこれかと立ち寄り見れば、げにいさぎよき山の井の、底澄み渡るさざれ石の、巌となりて苔のむす、千代に八千代の例までも、まのあたりなる薬の水、まことに老を、養ふなり。……げにや玉水の、水上澄める御代ぞとて、流れの末のわれらまで、豊かに住めるうれしさよ、豊かに住めるうれしさよ。

「底澄み渡るさざれ石の、……」という一節は、言うまでもなく、『古今集』の「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりてこけのむすまで」という歌に基づいた表現であり、「不思議なる泉」に天皇という存在が関係しているという理解が示唆されている。そして、「げにや玉水の、水上澄める御代ぞとて、流れの末のわれらまで、豊かに住めるうれしさよ」という詞章において、天皇が「水上」、民が「流れの末」と、両者の関係が水の流れにたとえられ、「水上澄める」ことで、「流れの末のわれらまで、豊かに住める」という雄略天皇の治世が称賛される。つまり、「げにいさぎよき山の井の、底澄み渡る……」と謡われる「不思議なる泉」も、天皇という存在が「澄める」ことによって湧き出たというのである。

やまと言葉の「すむ」には、大きく分けて、「澄む（清む）」「済む」「住む」の三つの漢字が当てられる含意がある。まず、「澄む（清む）」の原義は、「浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる意」（『岩波古語辞典』）であり、その浮遊物が沈着・静止するように、さまざまな問題が片づき収まることが「済む」で、一般的に、物事がすっかり終わること、借りを返すこと、予想していた程度以下や範囲内で収まることなどを意味している。そして、「住む」とは「スミ（澄）と同根。あちこち動きまわるものが、一つ所に落ちつき、定着する意」（同）であり、浮遊・変転・動揺・未済なものが何らかのかたちでクリアーになり解

決して、静かに定着するということが含意されている。[9]

このことを先の引用にあてはめて考えてみれば、天皇という「水上」が「澄む」ことにより、その「流れの末のわれらまで」「澄み」、そのことによって、ひとびとの抱えるさまざまな問題が「済み」、その落ち着きや安心の中でひとびとは「住む」ことができる、それが「豊かに住める」ということである。

この曲における、ひとびとの抱える問題とは、言うまでもなく、老いの問題である。若いころの華やかな容色も身体も徐々に衰え、世の中で居場所がなくなっていき、いずれは死んでいく——。老いとは、言ってみれば、無常そのものであり、そのことがひとびとの心を不安定にする。その不安定な心が、「老を養ふ滝川の、水や心を清むらん」——、雄略天皇の治世だからこそ湧き出た「澄む」水を飲むことで「澄み」「清」められて、「老をも忘れ」、「豊かに住める」という。老いのつらさ、淋しさを抱えた不安定な心が、落ち着き、安心といった、ある種の安定を得るのである。

無常ということに関して、先の引用の後に、次のような詞章がある。

それ行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にはあらず。流れに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結んで、久しく澄める色とかや。

言うまでもなく、鴨長明『方丈記』の冒頭部、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」をふまえたものである。津田左右吉は、ここに見られる言葉の改変を、「甚だしき牽強」「支離滅裂」と断じているが、[10] この改変にこそ、本曲を理解するうえで肝要な点があるように思われる。

「よどみ」を「流れ」に、「久しくとどまりたるためしなし」を「久しく澄める色とかや」にというこの改変は、無常ということを徹底して見つめつつ、しかしその無常そのものの中に「久しく澄める色」、つまり「久しく住める色」という、ある何らかの永遠なるもの、安定したものをまなざしている。そして、むろん、このことは、「さざれ石の、巌となりて苔のむす、千代に八千代の例までも、……」という詞章にあらわれているような天皇のあり方にかかわってくるのである。

四

親子は登場の際、先に見た「年を経し、美濃のお山の松蔭に、……老を養ふ滝川の、水や心を清むらん」に続け、次のように謡う。

奥山の、深谷の下の例かや、流れを汲むともよも絶えじ、流れを汲むともよも絶えじ。長生の家にこそ、長生の家にこそ、老いせぬ門はあるなるに、これも年経る山住みの、千代の例を松蔭の、岩井の水は薬にて、老を延べたる心こそ、なほ行末も久しけれ、なほ行末も久しけれ。

中国の山奥、深い谷の下に出るという、不老長寿の水の例と同じなのであろうか、この水の流れを汲んでもけっして絶えることはない。天皇の宮殿の長生殿にこそ、不老門はあるという。一方、私は、都から遠く離れた山中に、長い年月を過ごしてきた身ではあるが、千代の例として引かれる松にあやかることを願っている。この松蔭の岩の間から湧く水は薬であり、この水を飲み、「老を延べたる心」こそ、行く末は久しい——。

老父は、「長生」「不老」が、天皇、そして天皇の宮殿がある〈都〉に属するものであると考えている。それに対し、自分は、「山住み」、つまり、〈都〉から遠く離れた〈鄙〉の山に住むものであり、「長生」「不老」からは遠く隔たっている。しかし、そのような老父も、「千代の例」として引かれる松にあやかることを願っているという。

「千代の例」とは、松を指すと同時に、「……底澄み渡るさざれ石の、巌となりて苔のむす、千代に八千代の例までも……」という表現にも示唆されていたように、天皇という存在をも象徴している。親子は、この引用の前の部分で「年を経し、美濃のお山の松蔭に、なほ澄む水の、緑かな」と謡っていたが、その「松蔭」も当然、天皇という存在の蔭、つまり、自分たちが天皇という存在が治める場にあるということを意味している。美濃という〈鄙〉も、天皇という存在が治める場なのであり、そこにいる自分たちも、水が松の緑を映すように、天皇の影響を色濃く受けている。そして、「千代の例を松蔭の、岩井の水は薬にて」というように、「不思議なる泉」の水もまた、天皇という存在が治める場においてこそあらわれてくるというのである。

しかしながら、それは、天皇がこの国を一義的に支配できる能力を持つということではない。勅使と老父が水の効験と、それをひとびとの前にあらわした御代をたたえた後、シテは中入し、この山の神の姿をとってふたたび登場して、次のように謡い、舞う。

ありがたや治まる御代のならひとて、山河草木おだやかに、五日の風や十日の、天が下照る日の光、曇りはあらじ玉水の、薬の泉はよも尽きじ、あらありがたの奇瑞やな。これとても誓ひは同じ法の水、尽きせぬ御代を守るなる、われはこの山神の宮居、または楊柳観音菩薩、神といひ、仏といひ、ただこれ水波の隔てにて、衆生済度の方便の声、峰の嵐や、谷の水音とうとうと、拍子を揃へて、音楽の響き、たきつ

心を、澄ましつつ、諸天来去の、影向（やうがう）かな。

おだやかな自然のあり方は、「治まる御代のならひ」であり、玉のように澄んだ「薬の水」が尽きることもないであろう。「薬の水」が湧くというこのありがたい奇瑞も、この水と同じく永遠に尽きることがない御代を守ろうという、神仏に共通の願い・誓いによるものなのだ、と山神は教える。山神はまた、己の別名は楊柳観音菩薩であり、神と仏の違いは水と波の違いのようなもので、もとは同じものであるとも言う。

「治まる御代」の背景にあるのは、ひとびとの日常世界を超越した存在やはたらきである。それを、ひとは時として神と捉え、また時として仏と捉える。しかしそれはもとは同じものなのであり、いずれも、「治まる御代」をいつまでも守り続けようという願いを持つ存在でありはたらきである。その願いは、今、「薬の水」というかたちをとって、ひとびとの前にあらわれているのであるが、当然のことながら、その願い自体は今に始まったものではなく、神仏は遥か以前から、つねにその願いを持ちつづけてきている。しかしそれは、ひとびとにわかるかたちで、ひとびとの目の前にあらわれることがなかなかない。たとえば、「山河（さんか）草木（さうもく）おだやかに、五日（ごじつ）の風や十日（じふじつ）の、天（あめ）が下照（した）る日の光、曇りはあらじ、……」というおだやかな自然のあり方は、「治まる御代のならひ」であり、そのような日常の背後にあるものの願いが日常世界にあるかたちをとってあらわれたものであるが、そのような願いを目の前にしながら、ひとびとは滅多に、それをそれとして気づかない。「峰の嵐や、谷の水音」は、「衆生済度の方便の声」であるが、それを聞きとることができないのである。

ところで先に見たように、この国は、〈領る〉〈知る〉天皇によって「治まる」国であるのであるが、その背景にあるのが、このようなひとびとの日常世界を超越した存在やはたらきである。それが「薬の泉」という奇瑞としてあらわれるとき、ひとびとはその水の背景に、自分たちの日常世界を超えた神や仏といったものを感

じとり、ひいては、そのようなものの願いや誓いが、自分たちの日常世界をかくあらしめていること、その願いによって「治まる御代」が実現していることに気づくことができるのである。ひとびとが生きる日常世界は、いつの世も「治まる御代」であったが、そのことに気づくことができるような奇瑞をひとびとの目の前にもたらすのは、雄略天皇という、特に優れてこの国を〈領る〉〈知る〉天皇のはたらきである。

ここであらためて、「しる」という語についての大野晋の説明を引用すれば、「占領する、統治するとは、物を残るくまなく自分のものにすること。物を残るくまなく自分のものにするとは、単に所有、領有の意味をこえて、物の性質のすみずみまでも把握することを指すようになって行く」[11]というのであるが、日常世界を「残るくまなく」〈領る〉〈知る〉には、当然その背後の世界をも見通すことができなければならない。そもそも天皇とは、祭儀を通じて、神々つまり日常世界の背後にあるものと、ひとびととをつなぐ存在であった。それが可能になるのは、天皇という存在が、おしなべて、日本という国のあらゆるものを〈領る〉〈知る〉存在だからである。いうならば、天皇は、その〈領る〉〈知る〉というはたらきによって、ひとびとの日常世界と、その背後にあるものとを媒介する存在なのである。

こうして考えてみれば、「薬の泉」がひとびとの日常世界にあらわれるのは、当代の天皇である雄略天皇が、ひとびとの日常世界と、その背後にあるものとを媒介する天皇として、特に優れた存在であったからである。本論冒頭で見た『十訓抄』や『古今著聞集』、あるいは『続日本紀』といった「養老の滝」にまつわる話の多くが、その出現を元正天皇の時代としているのに対し、[12]謡曲「養老」がその時代設定を雄略天皇の御代としていることも、今述べてきたことと深く関係しているように思われる。

雄略天皇といえば、競争相手をつぎつぎとたたきのめして皇位に就くといったような、豪胆で強力な王者像を想像させるような記録が『古事記』や『日本書紀』に多々あったり、『万葉集』巻一の冒頭歌がその作とさ

れていたりと、現在でも古代の代表的天皇としてひとびとに広く認知されているが、ここで特に注目したいのは、雄略天皇にまつわる、次の二つの逸話である。一つめは、『古事記』『日本書紀』等に録されている、一言主の神と葛城山で遭遇する話、二つめは、『日本書紀』や『日本霊異記』の開巻第一話に録された、少子部(ちひさこべ)の栖軽(すがる)という従臣に命じて雷を捕らえる話である。紙幅の関係上、話の詳しい内容や、それぞれの記録の異同についてここで論じることはしないが、これらの広く知られた逸話は、雄略天皇が、神や雷といった、ひとびとの日常世界の背後にあるものと交流する能力を持ち合わせた特別な天皇であるというイメージを、われわれに抱かせるものである。[13] 謡曲「養老」が成立した時代に、これらの逸話がどれほど人口に膾炙していたかはわからないが、このような雄略天皇のイメージは、「薬の泉」をひとびとの目の前にあらわす天皇として、ふさわしいものであったのではなかろうか。

このような、日常の背後にあるものをひとびとの目の前にそれとしてわかるかたちであらわすという天皇としての特質を強烈に発揮する雄略天皇のはたらきによって、ひとびとの目の前に「薬の泉」があらわれ、ひとびとは、自分たちの日常の背後に、神仏といった存在が存する広がりがあることに気づくことになる。ひとびとの日常とは、あらゆるものが変わっていき、すべての人が老いていく、無常なる世界である。しかしその背後には、神仏といった、永遠なるものの世界がある。その永遠なるものの一端が、雄略天皇のはたらきにより、「薬の泉」としてひとびとの日常にあらわれたのである。

この国のあらゆるものを〈領る〉〈知る〉、そしてその背後にあるものをも見通す天皇とは、永遠なるものと交通する手立てを持つ存在である。「長生」「不老」が天皇に属するという老父の理解は、端的にはそのことを言っている。季節の移ろいに刻々とその姿を変えていき、無常なるものに見える自然も、年単位で見れば、同じ変化をくりかえし、永続・循環している。「冬なお緑する常緑の松、しかも春ごとに若緑りする松」[14] は、そ

のような、無常の背後にある永続・循環という自然のあり方を、ひとびとに気づかせるものである。その松に天皇が比せられるのも、この無常なる世界の背後にある常なるものを、ひとびとに垣間見せる存在であるからである。[15]

この日本という国において、ひとびとは、日常の背後にあるものとひとびととを媒介する天皇のはたらきの下に生きている。たとえば身のまわりに何気なくある自然は、天皇のはたらきの具現とも言えるようなものである。しかし普段の生活において、ひとびとは、そのはたらきになかなか気づくことがない。たとえば、「養老の滝」という名称の由来を聞いた後、勅使と老父は、次のような会話を交わしている。

げにげに聞けばありがたや、さてさて今の薬の水、この滝川のうちにても、とりわき在所のあるやらん。御覧候へこの滝壺の、すこしこなたの岩間より、出で来る水の泉なり。

「不思議なる泉」は、「養老の滝」そのものではなく、「養老の滝」の水が落ちる滝壺から、少し離れたところに湧き出ている。実際の舞台演出では、ここで老父のシテは湧き出る泉を見下す型をするが、中入後、山神となった後シテは、橋懸りからはるかに滝を見上げる型をする。[16]「養老」というありがたい名を持った滝は、ひとびとにはとても見通せないほどはるか遠い存在、つまり、治まる御代を守り続けようという日常の背後にある存在やはたらき、ここでは神仏の願いによってもたらされる恵みを象徴している。しかし「老を養ふ」という滝の水の効験は、滝そのものからではなく、足もとから湧き出る「不思議なる泉」において、つまり、天皇という媒介を通してはじめて、ひとびとにもたらされるのである。

日常の背後にあるもの、そしてそれをひとびとの前にあらわす天皇のはたらきに、ひとびとは普段なかなか

気づくことができないが、雄略天皇の御代にあらわれた「薬の水」の「不思議」さ、「霊異」ゆえに、親子はそのようなこの国のあり方に気づくことができた。だからこそ、あえて、「薬の水」が湧き出る泉それ自体ではなく、その背後にある滝の方に、「養老」の名を冠したのである。

きれいに澄んだ「薬の水」が湧き出て、それによって、日常の背後にあるもの、そしてそれをひとびとの前にあらわす天皇のはたらきが、ひとびとにもそれとして見えるほどに「澄む」御代、「水上澄める御代」であるからこそ、ひとびとは日常の背後にあるものに気づくことができる。また、普段は見えていないこの世のあり方が見えるようになるということは、ひとびとの心が「澄む」ということである。自分たちのこの無常なる日常が、常なるものによって支えられていることを知ることで、ひとびとの、老いのつらさ、淋しさに代表されるような無常の悲しさが何らかのかたちで「済み」、その落ち着きや安心の中でひとびとは「住む」ことができ、「豊かに住める」のである。

五

ひとびとは、天皇という存在を通して日常の背後にあるものに気づき、「澄み」「済む」ことで、「豊かに住める」。しかし、天皇とひとびととの関係は、必ずしも、天皇という「水上」から民という「流れの末」へ、という一方的なものではない。

勅使が老父に「不思議なる泉」に案内され、両者が「……千代に八千代の例までも、まのあたりなる薬の水、まことに老を、養ふなり」と謡った後に、次のような詞章がある。

老をだに養はば、まして盛りの人の身に、薬とならばいつまでも、御寿命も尽きまじき、泉ぞめでたかりける。

「御寿命」とは、当然、天皇の寿命のことを指す。この泉の水が老いを養うというのならば、まして盛りの人の身には薬となるであろう、そうであれば天皇の御寿命が尽きることはあるまい、というのである。そしてこの後には、「汲めや汲め御薬（みくすり）を、君のために捧げん」という詞章があるのであるが、天皇という存在を介してもたらされた「薬の水」を、今度は天皇に捧げるというこのことは、いったいいかなる行為なのであろうか。そして、親子にはあきらかな長命や若返り、不老不死をもたらしてはいない「不思議なる泉」の水によって、天皇の「御寿命も尽きまじ」というのは、なぜなのであろうか。

ところで、老父の話を一通り聞いた勅使は、その感激を、「げにありがたき薬の水、急ぎ帰りてわが君に、奏聞せんこそうれしけれ」と表現していた。「薬の水」という奇瑞を目の当たりにできたことではなく、その奇瑞のことを「急ぎ帰りてわが君に、奏聞」できることがうれしい、というのである。

そもそも勅使は、それが何であるかを天皇が十全に〈知る〉ことができていない「不思議なる泉」を「急ぎ見て参れ」という天皇の命を受けて、美濃の地にやってきた。そして親子の話を聞くことで、「不思議なる泉」が、まさに天皇の媒介によってもたらされた「薬の水」であることがあきらかになる。天皇のはたらきは、〈都〉から遠く離れた〈鄙〉の山中、しかも天皇も〈知る〉ことができていないと思われた「不思議なる泉」にまで及んでいる。それはつまり、雄略天皇の〈領る〉〈知る〉はたらきによって、この国が十全に治められ、治まっていることを意味している。老父が、「薬の水」を飲むことで、日常の背後にあるもの、そしてそれをひとびとの前にあらわす天皇のはたらきに気づき、老いに悩む心が「澄み」、「豊かに住める」のも、天皇のは

たらきによって、老父の心がおさめられ、おさまっているということである。

しかし、当の天皇は、そのことをはじめからあきらかに認識できているわけではない。だからこそ、勅使を送ったのである。つまり、天皇の〈領る〉〈知る〉はたらきは、勅使による「薬の水」や民のあり方の報告によって、はじめて完成するものなのである。

この曲の最後、山神は雄略天皇の御代を称えて神舞を舞い、次のように歌う。

松蔭に、千代を映せる、緑かな。さもいさぎよき、山の井の水、山の井の水、山の井の、水滔々として、波悠々たり。治まる御代の、君は舟、君は舟、臣は水、水よく舟を、浮べ浮べて、臣よく君を、仰ぐ御代とて、幾久しさも、尽きせじや尽きせじ、君にひかるる、玉水の、上澄む時は、下も濁らぬ、滝つ水の、浮き立つ波の、返す返すも、よき御代なれや、よき御代なれや、……

ここではまず最初に、松に比せられる天皇の蔭で、その松の緑色を映す澄んだ水としての民という、先にすでに見たような天皇と民の関係が描かれている。そして民をあらわす水は、「水滔々として、波悠々たり」と、まさに「治まる御代」にふさわしい、悠然とした状態であるというのであるが、その最初の比喩を受けるかたちで、その次には「君は舟、臣は水」にたとえられ、臣である水は、「よく舟を、浮べ」るという。この表現は、『荀子』の「君ハ船也、庶人ハ水也、水ハ則チ船ヲ載セ、水ハ則チ船ヲ覆ス」という、船である「君」が水に「載」るか「覆」えされてしまうかは、水にたとえられる「庶人」のあり方によって決まってくるという言葉に基づいたものである。[17] そしてさらに、「君にひかるる、玉水の、上澄む時は、下も濁らぬ」と、ふたたび、天皇のあり方によって民のあり方が決まるということが言われるのであるが、つまり、天皇と民の間には、

天皇のあり方によって民のあり方は決まり、その民のあり方によって今度は天皇のあり方が決まる、そしてまたその天皇のあり方が民のあり方に反映される……、という循環があるというのである。

そしてその循環の先にあるのは、「滝つ水の、浮き立つ波の、返す返すも、よき御代」である。前節で見た山神の謡に、「たきつ心を、澄ましつつ」という表現があったが、「たきつ」は、「滝の」という意味と同時に、「たぎつ（滾つ・激つ）」という、心がいらだち、落ち着かない状態をあらわす意味も含んでいる。老いをはじめとする、さまざまな問題で「たきつ心」も、天皇から「薬の水」がもたらされ、自分たちの日常の背後にあるものと、それとひとびととを媒介する天皇のはたらきを知ることによって、「心を澄ま」すことができる。そして、その「薬の水」のことが今度は天皇に伝えられることで、天皇によって「治まる御代」があらためて確認され、よりたしかなものとなる。天皇と民との間で、「薬の水」を通して互いのあり方が「返す返す」反映されることで、「治まる御代」「臣よく君を、仰ぐ御代」「よき御代」がよりたしかなもの、深みを増したものとなっていくというこの国のあり方が、ここには描かれているである。

ここまで見てきたように、「治まる御代」「よき御代」がよりたしかなものとして実現するには、天皇のはたらきによっておさめられ、おさまっている民のあり方を、民の側から天皇に「返す」ということが不可欠である。それはここでは、天皇が十全に〈知る〉ことができていないように思われた「不思議なる泉」が、実は天皇の〈領る〉〈知る〉はたらきによってわれわれにわかるかたちでもたらされたもので、それによって民の心が「澄み」、そして「豊かに住める」ようになる「薬の水」であったことを天皇に奏聞することであり、それが、「御薬を、君のために捧げ」るということなのである。そして、「薬とならばいつまでも、御寿命も尽きまじ」というのは、雄略天皇その人が長命あるいは不老不死になるということではなく、〈領る〉〈知る〉ことでこの国を治めるという天皇のはたらきがあらためて確認されることで、よりたしかなものとなった「治まる御

代」「よき御代」が尽きることなく続いていくであろうということを言っているのである。

ひとびとの背後にはいつの世も、神や仏といった何かしら永遠なるものがある。そしてその恵みは、「尽きせぬ御代を守る」という願い・誓いとして、つまり、〈領る〉〈知る〉ことでこの国を治める天皇という存在を介して、ひとびとにもたらされる。そのようなこの国のあり方に気づくことができるほどに心が「澄む」ことで、ひとびとの老いのつらさ、淋しさに代表されるような無常の悲しさは何らかのかたちで「済み」、その落ち着きや安心の中で「住む」ことができる。

そして、そのように、天皇のはたらきによって「豊かに住める」自身のあり方を表現すること――、「薬の水」や民のあり方を天皇に報告することは、「治まる御代」をよりたしかなものにすることであると同時に、自身が、そのよりたしかになった「治まる御代」の一端を担うものになるということでもある。そのことにおいて、無常なるひとびとは、無常なるままに、「治まる御代」が尽きることなく続いていくこの世の一隅に、たしかに位置を占めることができるのである。

この曲の作者である世阿弥は、老年になって流された佐渡において、次のように書いている。

遠くとも、君の御蔭に洩れてめや、八島の外も同じ海山。（『金島書』）

永享八年、世阿弥七十四歳であった。

■註

1 新編日本古典文学全集『十訓抄』（小学館、一九九七）。『十訓抄』成立直後にまとめられた『古今著聞集』にも、同じ話が、文言もほぼそのままに収録されている。

2 以下「養老」の引用は、新編日本古典文学全集『謡曲集（一）』（小学館、一九九七）に拠る。

3 前ジテの老人が退場し、後ジテの山神が登場するまでの中入に、アイ（狂言方）の里人が登場し、この水の効験を、「かの親子の者、その滝壺に至り、水を掬びてたべ候へば、老人夫婦は真つ盛りの者となり、子はいよいよ若くまかりなりて候」と、若返りをもたらすもののように説明する文言がある。しかし、この中入に関しては、「前場の末尾の〈上歌〉の詞章からすると、前シテは中入せず、そのまま舞台にいて、アイの場面もなくて、ひき続き別の役者が山神として登場するのが、原型であろう」（前掲新編日本古典文学全集）、「前場の終りの詞章に照らすと、ここですぐ山神が出現しないと不自然で、古くは、親子の者が勅使と共に舞台に残り、別に山神が登場したのではないかと考えられている」（新日本古典文学大系『謡曲百番』、岩波書店、一九九八）という理解が一般的である。また、小書（特殊演出）《水波之伝》では、この間狂言が省略され、後ジテの前に後ツレが登場し、天女ノ舞を舞う。これらのことから、本曲の成立時にはこの中入は存在しなかったと考えられ、したがってこのアイの台詞も本曲のもともとの思想を伝えるものではない可能性が高い。

4 吉村均「『養老』の世界――天皇・民・神仏――」（『倫理学紀要』第七輯、一九九一）。

5 『続日本紀』養老元年十一月十七日条には、美濃国不破行宮に行幸した元正天皇が、その途上「当耆郡多度山の美泉を覧て、自ら手面を盥ひしに、皮膚滑らかなるが如し。亦、痛き処を洗ひしに、除き愈えずといふこと無し。……」という不思議な泉に立ち寄り、「醴泉は美泉なり。以て老を養ふべし」という符瑞書（瑞祥に関して記した書）の記述にしたがって、霊亀から養老へと改元し、大赦を発したという記述がある。

元正天皇による行幸、養老への改元等のモチーフをこの記録と共有する『十訓抄』『古今著聞集』の養老説話に対し、時代設定も異なり（雄略天皇代）、天皇の行幸もなく、美濃という土地、「養老」という言葉、効験あらたかな水ということ以外、重なる要素がほとんどない謡曲「養老」は、これらとは違う系統の伝承・記録に材を求めた可

能性が高いと考えるむきもある。

謡曲「養老」の典拠については、鳥居明雄・佐藤健一郎「養老とその周辺（一）～（三）」（『宝生』昭和五十二年一月～三月号）、天野文雄『世阿弥がいた場所』（ぺりかん社、二〇〇七）等に詳細な研究があるが、本論ではある思想の表現として謡曲「養老」を見ていくことを課題とし、本曲成立の背景について主題的に論じることはしない。

6 大野晋『日本語の年輪』（有紀書房、一九六四）。

7 言うまでもなく、このことは「しろしめす（しらしめす）」という語の含意にも見てとることができる（小学館『日本国語大辞典』）。

8 菅野也寸志「めでたさの構造――「養老」の世界」（『季刊日本思想史』二十四号、一九八四）。

9 竹内整一『花びらは散る　花は散らない――無常の日本思想』（角川書店、二〇一一）にまとまった考察がある。

10 津田左右吉「文学に現はれたる国民思想の研究」二（『津田左右吉全集』第五巻、岩波書店、一九六四所収）。

11 前掲註6。

12 前掲註5参照。

13 『日本霊異記』開巻話に雄略天皇が雷を捕らえる逸話がおかれていることの思想背景に関しては、拙稿「天皇の「恥」が意味するもの――『日本霊異記』上巻第一縁考」（『日本思想史学』第四十二号、二〇一〇）で詳しく論じた。

14 相良亨「世阿弥の宇宙」（『相良亨著作集6　超越・自然』ぺりかん社、一九九五所収）。

15 むろん、そこには、それぞれの天皇は老い、崩御するが、代替わりによって、天皇という位格は永続するということとの類比という理由もあるであろう。

16 徳江元正「作品研究「養老」」（『観世』昭和四十五年五月号）、武藤千鶴子「謡い方と鑑賞『養老』」（『観世』昭和四十五年六月号）。

17 前掲註2新編日本古典文学全集『謡曲集（一）』頭註参照。

（いとう・ゆきこ　東京大学大学院人文社会系研究科グローバルＣＯＥプログラム特任研究員）

"Alleviating Old Age": The Background of the Noh Script *Yōrō*

Yukiko Itō

In the Noh play *Yōrō*, thought to have been written by Zeami, an imperial messenger has been dispatched to Mino Province far from the capital because of rumors of a mysterious spring. He interviews the father and son who discovered the spring and listens to their description of the auspiciousness of the spring's water. Later, the local mountain deity appears and praises the reign of Emperor Yūryaku, in which such auspicious water wells up from below.

While the old father says that one feels extremely elated when drinking water from this mysterious spring that has appeared near a waterfall called Yōrō and it certainly has the effect of "alleviating old age," he points out that this does not mean that drinking from the spring prolongs one's life span, makes one young again, or turns one into an immortal.

The water from this spring is extremely pure, and upon drinking it, the hearts of people are also purified from the hardship of old age. The purity of the water affects all aspects of people's lives, although it cannot stop the process of growing old itself.

In this story, this water also symbolizes the relationship between the emperor and the people. When the upper stream, standing in for the ruler of the realm, is pure, then the people, portrayed as the lower stream, can have their hearts purified, their spirits lifted, and live fulfilled lives. In the play, all these effects are expressed using the homophone verb *sumu* in combination with different Chinese characters to express this interwoven relationship. Behind the people of the realm and nature

as such looms the presence of the emperor and everyone lives because of his grace. By becoming aware of this cosmological structure, the people gain the ability to locate themselves within this world and live content lives.

This does not mean that their lives become liberated from the hardships of life, but *Yōrō* rather serves to transmit Zeami's own worldview and philosophy that by being able to locate oneself in this world, one experiences closure and emotional relieve.